帝塚山大学心理科学論集 2020年 第3号 pp.21-28

原著論文

被拒絶感および被受容感が中核信念やストレス反応におよぼす影響

小林 光栄・大久保 純一郎

問題

はじめに

近年，他者からの拒絶の影響を検討するための様々な研究が行われている。他者からの拒絶は所属欲求をおびやかし（Baumeister & Leary, 1995），対人関係上の問題や自身への評価への低下にも繋がる。また，他者が自身を拒絶することによって，集団への所属が危うくなると，社会生活や生存をしていくにあたって不利な状況が生じる。そのため，他者からの受容もしくは拒否は人間にとって一大関心事である（本多・桜井， 2000）。また，過去の受容・拒絶体験が現在の関係における認知や情動に影響し続けることが明らかになっている（Bowlby, 1973）。そのため，拒絶場面における他者との関係性や（宮崎 ，2011），拒絶または受容されている感覚について，抑うつの観点から研究がされてきたが（杉山，2004），拒絶や受容に関して個人の認知に関する研究が行われていない。そこで，本研究は，拒絶および受容されている感覚について，個人の認知を形成する中核信念の観点からに着目し，メンタルヘルスとの関係について明らかにすることとした。

中核信念（スキーマ）

人は，過去に受けた対人関係や対人感覚を基に自身の考え方や行動の仕方を決めている。その考えや行動を規定するもととなるものは信念と言われる。その中で， 特に認知枠組みの根幹を成すものを中核信念（スキーマ）と言う。中核信念は，人の思考や感情の根底にある持続する価値観や人生観，信念などである。中核信念はあまりにも深く基底的な層にある持続的信念であるため，ほとんどの人は自分自身の中核信念について明確化することはない（Beck, 1995 伊藤・神村・藤澤訳2004）。

中核信念は，その人の物事へのとらえ方や判断基準となる媒介信念を生み，媒介信念は状況に対する状況認知に影響を与える。その状況的認知から，その瞬間に思い浮かぶ思考やイメージである自動思考が発生し，行動や感情，身体へ影響を与える（Beck, 1995 伊藤・神村・藤澤訳2004）。

そのように，中核信念は，ある具体的な状況に対する認知に影響を与えることが明らかにされている。したがって，中核信念に偏りがある場合は，非適応的な行動や感情に結びつくことがあると考えられる。

被拒絶感

中核信念に影響を及ぼす要因の一つに，対人拒絶を受けた経験が挙げられる。人は他者と関係を形成し維持したいという欲求（所属欲求）を持ち，拒絶によりこの欲求が満たされないと深い喪失感が生じ，精神的な健康を損なうと言われている（Baumeister & Leary, 1995）。対人拒絶は他者との相互作用を得たいという欲求や環境や関係をコントロールしたいという統制などの欲求を阻害し（Williams & Zadro, 2005），被拒絶感を生じさせる。

被拒絶感とは，「他者に疎まれる，嫌がられるといった対人関係の心細さ」を表す概念である（杉山・坂本，2006）。Downey & Feldman（1996）は，被拒絶感受性を「拒絶させることを不安に思い，拒絶を予測し拒絶を素早く知覚し敵意的な反応をとる」特性と定義し，拒絶感受性が高い人は拒絶に過剰反応し，そのため適応的な対応を取ることができないとしている。相田・磯部（2015）は，実験場面において被拒絶感受性の高い者は，常に他者の表情に注目していることを明らかにしており，近江・田名場（2004）は，攻撃を受けたと判断した場合に感じる被拒絶感は，攻撃を受けた対象だけではなく，それ以外の対象に対しても感じることがあることを明らかにしている。

被拒絶感受性と被拒絶感との関係は，先行研究では述べられていないが，被拒絶感は「他者に疎まれる，嫌がられるといった対人関係の心細さ」を表す概念であり， 被拒絶感受性が「拒絶させることを不安に思い，拒絶を予測し拒絶を素早く知覚し敵意的な反応をとる」特性であることから，被拒絶感受性は被拒絶感が高まり，人に対し緊張をもち警戒心を抱いている状態であると考えられ，被拒絶感と被拒絶感受性は同じ状態ではないものの被拒絶感受性はその人の特性としての被拒絶感を表していると考えられる。

被受容感

被拒絶感と対称的に考えられる概念に被受容感があげられる。被受容感とは，「自分は他者に大切にされている」という認識と情緒であり（杉山・坂本 ，2006），他者からの受容をどのように感じているかの概念である。被受容被受容感と被拒絶感は同じ次元であるとみなされることがあるが，被拒絶感を感じないからといって被受容感につながるわけではなく，（杉山・坂本 ，2006）は，これらは，それぞれ異なる次元であるとすることが適切な場合があることを指摘している。他者からの受容と拒絶に対するその人の認知について考えるにあたって，被受容感にも注目する必要があると考えられる。

被拒絶感と中核信念

被拒絶感と中核信念について，Stuart, David, Shannon & Allison（2015）は親からの拒絶と自傷行為に

ついて調査を行い，拒絶が対人関係および対人関係への不適応スキーマに影響を与えることを明らかにした。また，Staebler, Helbing, Rosenbach, Renneberg（2011）は，被拒絶感受性の質問紙において，境界性人格障害の患者の群が他の群と比較して高いスコアを示したことを明らかにしている。中核信念は幼少期のかなり早い段階で自身や他者，自分を取り巻く世界についての信念であり（Beck, 1995 伊藤・神村・藤澤訳2004），広範な社会の中で個人が学習し経験したことの積み重ねより中核信念は作られる。中核信念が人生に影響を及ぼすかの要因の一つとして，中核信念がどのくらい強力に強化されてきたかが挙げられている（Freeman, 1989 遊佐監訳1995）。対人拒絶は所属欲求を脅かし，他者との関係がうまくいかなくなることや，その集団に存在していられなくなる危険性が高まることで，感情面や行動面，認知面での反応を引き起こす（岡田・中山，2008）。対人感情は，ひとたび形成されると思考や判断，認知処理に影響を与え（高木，2004），過去の拒絶経験などにより拒絶への予期不安が形成されることによって，それが拒絶の感じ取りやすさや適応的でない認知などを生み出し，自己充足的に強化されていくと言われている（Levy et al, 2001）。よって，拒絶体験により被拒絶感が形成され，中核信念に影響を与えると考えられる。

このように，被拒絶感は対人拒絶という経験を通して中核信念に影響を及ぼし，非適応的な行動や感情をもたらすことが考えられる。しかしながら，現時点では，被拒絶感が中核信念に及ぼす影響については明らかにされていない。被拒絶感が中核信念に及ぼす影響を明らかにすることは，被拒絶感を持つ人に対して，どのようなアプローチをしていくかについての知見を得ることが出来ると考えられるため，本研究で被拒絶感が中核信念に及ぼす影響を検討する。なお，被拒絶感と対照的にとらえられている被受容感についても着目し，被受容感が中核信念に及ぼす影響についても検討する。

被拒絶感とメンタルヘルス

杉山・坂本（2006）は，被受容感が抑うつを軽減する効果があるものの，被拒絶感は抑うつ的自己注目を増強させ，自尊心の低下とさらなる否定的な自己認知をまねくというメカニズムに関与し，抑うつに結びつくことを明らかにしている（杉山・坂本，2006）。抑うつは，精神的身体的な不調を生じさせ，うつ病や対人不安などに繋がる場合がある。よって，被拒絶感を感じることで，対人感覚や対人関係について非適応的な感情や感覚が生じ，そのことによって，精神的身体的な不調を生じることが予想される。現時点では，被拒絶感を感じたときの心身の状態ついては明らかにされていない。本研究にて被拒絶感を感じたときの心身の状態について検討する。

被拒絶感と性差

抑うつ的自己認知過程の研究の中で，被拒絶感には性差があり，女性における被拒絶感の抑うつ過程への関与が大きいことが杉山・坂本（2006）によって明らかになっている。本研究においても，性差が生じる可能性があるため，性差との関連についても検討する。

目的

以上のことから，次に示す3点について明らかにすることを目的として，本研究を行った。第1の目的として，被拒絶感と中核信念の関連を明らかにし，被拒絶感が中核信念に及ぼす影響について明らかにする。第2の目的として，被拒絶感によって，どのようなメンタルヘルス上の問題が生じやすいか，ストレス反応という観点から検討を行なう。第3の目的として，被拒絶感には性差があることが杉山・坂本（2006）によって明らかになっているため，性差との関連についても検討する。

そこで，被受容感・被拒絶感が中核信念に影響を及ぼすことでストレス反応が生じるというモデルを想定し，被受容感・被拒絶感，中核信念，ストレス反応の関連を検討する。

方法

調査対象者

近畿圏の大学に所属し，心理学に関する授業を受講している2, 3, 4年次の大学生283名を対象に質問紙調査を実施した。対象者の内訳として，理系の学生が約半数であった。フェイスシートや解答欄に未記入や重複回答などがあった33名を除外し，回答に不備の無かった250名（男性132名，女性118名，平均20.18歳，*SD*=1.58）を分析対象とした。

調査票

調査票は，フェイスシート（性別，年齢，学年），ならびに以下の3種の質問紙から構成された。

1）**被受容感・被拒絶感尺度** 被受容感被拒絶感を測定するために，杉山・坂本（2006）の作成した被受容感・被拒絶感尺度を用いた。被受容感尺度8項目と被拒絶感尺度8項目の2つの下位尺度より構成されている。「5.よくあてはまる」から「1.全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた（項目例 私はよく批判される）。

2）**Brief Core Schema Scales** 中核信念を測定するために，山内・須藤・丹野（2009）の作成した日本語版Brief Core Schema Scales を用いた。この尺度は，Fowler, et al.（2006）の作成したBrief Core Schema Scalesを日本語版にしたものである。この尺度はネガティブな自己スキーマ（Negative Self：NS）6項目，ポジティブな自己スキーマ（Positive Self：PS）6項目，ネガティブな他者スキーマ（Negative Others：NO）6項目，ポジティブな他者スキーマ（Positive Others：PO）6項目の4下位尺度の24項目から構成される。各項目について「はい」か「いいえ」で回答し，「い

いえ」の場合は0点，「はい」の場合は「少しそう思う」（1点）」から「完全にそう思う」（4点）の5件法で回答を求めた（項目例　私は愛されていない）。

3）**ストレス自己評価尺度**　心身のストレス状態を測定するために，尾関（1993）の作成した大学生用ストレス自己評価尺度を用いた。この尺度はストレッサー尺度40項目およびストレス反応尺度35項目，コーピング尺度19項目の3つの下位尺度から構成されており，本研究では，下位尺度のうち，ストレス反応尺度35項目を用いた。尾関（1990，1993）は，心理的ストレス反応尺度（新名・坂田・矢富・本間，1990）及び身体的ストレス反応尺度（穂坂・矢富・新名・本間・坂田，1989）の各項目をもとに，35項目からなるストレス反応尺度を作成した 。ストレス反応尺度は更に抑うつ，不安，怒りの3つの下位尺度からなる情動反応15項目，情動的混乱，引きこもりの2つの下位尺度から成る認知・行動的反応10項目，身体的疲労感，自律神経系の活動亢進という2つの下位尺度から成る身体的反応10項目によって構成されている（尾関，1993）。「3.非常にあてはまる」から「0.全くあてはまらない」の4件法で回答を求めた。

倫理的配慮

対象者に対して調査依頼書を手渡し，a）本研究は対人関係についての考えが心身の状況に及ぼす影響についての検討することを目的としていること，b）データの取り扱いとc）プライバシーや個人情報の保護，d）研究への参加辞退の機会保障，e）不利益や危険の防止への配慮などについて説明するとともに，質問紙への回答をもって同意を得たこととするという点について伝えた。また，本研究は本学の倫理審査委員会の承認を得て行った。（受付番号30-15）

結果

記述統計と性差

各尺度について，平均値と標準偏差を男女別に算出した。ストレス自己評価尺度においては，3つの下位尺度を合計したストレス反応として値を算出した。また，性差の有無を確認するために，各尺度においてt検定を行った。各尺度の尺度得点は，各尺度の下位尺度測定値を全て加算し総数で割った得点を尺度得点として算出した。いずれの下位尺度得点も，得点の高いほど，その事柄の程度が高いことを表す。Table 1に，各尺度の平均値と標準偏差を男女別，全体で示すとともに，性差に関する検定結果を示した。

全ての尺度において，性差は有意差ではなかった。

Table 1 男女別の平均値と*SD*および *t* 検定の結果

	女性		男性		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
被受容感被拒絶感					
被受容感	3.87	0.53	3.80	0.61	-1.06
被拒絶感	1.90	0.70	2.04	0.76	1.49
Brief Core Schema Scle					
自己ネガティブ（NS）	1.40	0.54	1.38	0.63	-0.37
自己ポジティブ（PS）	1.47	0.47	1.57	0.55	1.67
他者ネガティブ（NO）	1.06	0.38	1.14	0.49	1.47
他者ポジティブ（PS）	1.81	0.45	1.89	0.49	1.30
ストレス尺度					
ストレス尺度	0.66	0.59	0.56	0.55	-1.49

重回帰分析

被拒絶感と中核信念，およびストレス反応の関連を見るために，性別（ダミー変数），年齢，被受容感，被拒絶感尺度，およびBrief Core Schema Scalesの4下位尺度であるNS, PS, NO, POを説明変数，ストレス自己評価尺度を目的変数とした重回帰分析を行った。ダミー変数は男を1，女を2として割り当てた。全対象者，男性のみ，女性のみを分析対象とした。分析結果をTable 2に示した。

全対象者において，調整済みR^2＝.534で有意（p＜.01）であった。ストレス反応に対して，NS（β=.556, p＜.01）とNO（β=.182, p＜.01）が有意な正の影響を与え，PS（β=－.156, p＜.05）が有意な負の影響を与えることが示された。多重共線性の指標となるVIFは1.00―2.42であり，問題を示す経験的な基準である10を下回るものであった。

男性においては，調整済みR^2＝.509有意（p＜.01）であった。ストレス反応に対して，NS（β=.602, p＜.01）が有意な正の影響を与えることが示された。多重共線性の指標となるVIFは1.00―2.49であった。

女性においては，調整済みR^2＝.571で有意（p＜.01）であった。ストレス反応に対して，NS（β=.478, p＜.01）とNO（β=.319, p＜.01）が有意な正の影響を与えることが示された。多重共線性の指標となるVIFは1.00―2.74であった。

Table 2 ストレス反応尺度を目的変数とした重回帰分析結果

	目的変数		
	ストレス反応		
説明変数	全対象者	男性	女性
Demographic変数			
性別	.084		
年齢	.050	.024	.092
被受容感被拒絶感尺度			
被受容感	-.047	.040	-.236*
被拒絶感	-.007	.064	-.170
Brief Core Schema Scales			
自己ネガティブ（NS）	.556**	.602**	.478**
自己ポジティブ（PS）	-.156*	-.122	-.173
他者ネガティブ（NO）	.182**	.136	.319**
他者ポジティブ（PS）	.029	-.043	.012
調整済みR^2	.534**	.509**	.571**

*p＜.05,**p＜.01

次に，Brief Core Schema Scalesの4下位尺度であるNS, PS, NO, POをそれぞれ目的変数として，性別（ダミー変数），年齢，被受容感，被拒絶感尺度を説明変数とした重回帰分析を行った。Table 3に全対象者の分析結果を示した。

NSにおいては，調整済みR^2＝.337で有意（p＜.01）で

あり，被拒絶感（β=.514, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。PSにおいては，調整済みR^2=.162で有意（p<.01）であり，被受容感（β=.452, p<.01）が有意な正の影響を与え，性別（β=−.119, p<.05）が有意な負の影響を与えることが示された。NOにおいては，調整済みR^2=.282で有意（p<.01）であり，被拒絶感（β=.568, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。POにおいては，調整済みR^2=.117で有意（p<.01）であり，被受容感（β=.332, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。多重共線性の指標となるVIFは1.00―1.83であった。

Table 3　Brief Core Schema Scalesを目的変数とした重回帰分析結果（全対象者）

	目的変数			
	Brief Core Schema Scales			
	自己ネガティブ	自己ポジティブ	他者ネガティブ	他者ポジティブ
Demographic変数				
性別	.078	-.119*	-.043	-.110
年齢	-.030	.099	.005	-.045
被受容感被拒絶感尺度				
被受容感	-.111	.452**	.051	.332**
被拒絶感	.514**	.127	.568**	-.033
調整済みR^2	.337**	.162**	.282**	.117**

*p<.05,**p<.01

さらに，同様の分析を男女別に行った（Table 4，5）。

男性では，NSにおいては，調整済みR^2=.330で有意（p<.01）であり，被拒絶感（β=.501, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。PSにおいては，調整済みR^2=.077で有意（p<.01）であり，被受容感（β=.330, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。NOにおいては，調整済みR^2=.294で有意（p<.01）であり，被拒絶感（β=.467, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。POにおいては，調整済みR^2=.065で有意（p<.05）であり，被受容感（β=.258, p<.05）が有意な正の影響を与えることが示された。多重共線性の指標となるVIFは1.00―1.80であった。

Table 4　Brief Core Schema Scalesを目的変数とした重回帰分析結果（男性）

	目的変数			
	Brief Core Schema Scales			
	自己ネガティブ	自己ポジティブ	他者ネガティブ	他者ポジティブ
Demographic変数				
年齢	-.028	.131	.058	-.089
被受容感被拒絶感尺度				
被受容感	-.123	.330**	-.117	.258*
被拒絶感	.501**	.146	.467**	-.044
調整済みR^2	.330**	.077*	.294**	.065**

*p<.05,**p<.01

女性では，NSにおいては，調整済みR^2=.333で有意（p<.01）であり，被拒絶感（β=.528, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。PSにおいては，調整済みR^2=.319で有意（p<.01）であり，被受容感（β=.646, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。NOにおいては，調整済みR^2=.315で有意（p<.01）であり，被受容感（β=.334, p<.01）と被拒絶感（β=.746, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。POにおいては，調整済みR^2=.190で有意（p<.01）であり，被受容感（β=.447, p<.01）が有意な正の影響を与えることが示された。

多重共線性の指標となるVIFは1.00―1.84であった。

Table 5　Brief Core Schema Scalesを目的変数とした重回帰分析結果（女性）

	目的変数			
	Brief Core Schema Scales			
	自己ネガティブ	自己ポジティブ	他者ネガティブ	他者ポジティブ
Demographic変数				
年齢	-.034	.051	-.090	.069
被受容感被拒絶感尺度				
被受容感	-.091	.646**	.334**	.447**
被拒絶感	.528**	.115	.746**	-.006
調整済みR^2	.333**	.319**	.315**	.190**

**p<.01

以上の重回帰分析の結果の要約したパス図をFigure 1，2に示した。

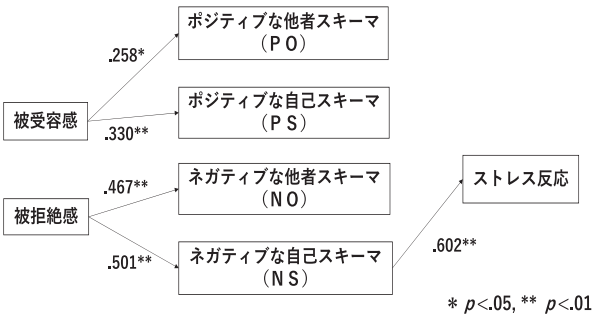

Figure 1. 被受容感・被拒絶感および中核信念が大学生用ストレス反応に及ぼす影響（男性）

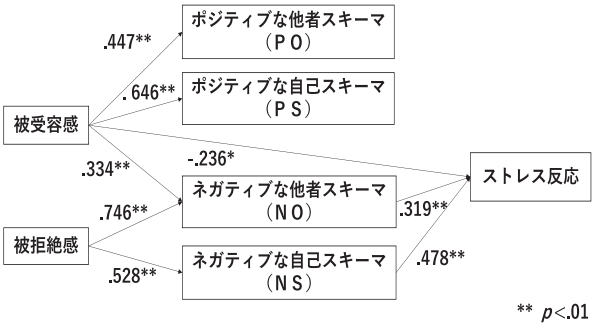

Figure 2. 被受容感・被拒絶感および中核信念が大学生用ストレス反応に及ぼす影響（女性）

考察

本研究は，被拒絶感と中核信念の関連および，被拒絶感が中核信念に及ぼす影響を明らかにし，被拒絶感を感じた結果，どのような心身の状態にあるかを検討した。性差は有意ではなかったが，男女による結果の差が見られため，男女別での考察を行った。先行研究において性差がみられたが，本研究では性差がみられなかった理由として，本研究では対象者が理系に偏っていること，先行研究では女性の方が多かったことが考えられる。また，本研究と先行研究に年代差があることから，男性女性の意識において性差が弱まっている可能性も考えられる。

被受容感被拒絶感と中核信念

男性においては，被受容感がPSおよびPOを高めていた。その理由として，被受容感は「自分は他者に大切にされている」という認識と情緒であり，それが高まることで自己や他者についての良い感情や評価が深まり，PSおよびPOが強まると考えられる。また，被拒絶感がNOおよびNSを高めていたことについては，被拒絶感は「他者に疎まれる，嫌がられるといった対人関係の心細さ」であり，それが高まることで他者や自己について悪い感情や評価が深まり，NOおよびNSが強まると考えられる。

女性においては，被受容感がPSおよびPOを高めていた。男性と同様に，被受容感が高まることで自己や他者についての良い感情や評価が深まり，ポジティブな自己や他者へのスキーマが強まると考えられる。また，被受容感は被拒絶感とともにNOを高めていた。NOは，「他の人たちはずるい」や「他の人たちは悪い人間だ」などの他者に対するネガティブなスキーマであり，被受容感は「自分は他者に大切にされている」という認識と情緒である。被受容感によってNOが高まるということは，自己が受け入れられている感覚があるものの，受け入れられていることに対して「他の人はずるくて悪いので私を利用している」など他者に対して警戒心や疑いのような感覚をもってしまうのではないかと考えることができる。対人関係において女子は男子に比べて親和欲求が高く，親密な人間関係の形成・維持を求めやすいことが報告されている（榎本，2000）。また女子の仲間集団は凝集性が高く，周りから自分がどのように見られているのかという意識が高まりやすいとされている（奥野・小林，2005）。そのことから，他者との関係において複雑な感情を感じやすいのではないかと考えられる。また，被拒絶感は，NOおよびNSを高めていた。男性と同様に，被拒絶感が高まることで自己や他者についての悪い感情や評価が深まり，ネガティブな自己や他者へのスキーマが強まると考えられる。

中核信念とストレス反応

男性においては，NSがストレス反応を強めるものの，NOおよびPS，POはストレス反応に関連が無かった。男性において，NSのみがストレス反応を強めていることは，他者からはあまり影響を受けず，自身の評価が悪い時のみストレス反応を感じると考えられる。

女性においては，NOおよびNSがストレス反応を強めるものの，PSおよびPOはストレス反応に関連が無かった。女性において，NOおよびNSがストレス反応を強めていることは，女性は自身への悪い評価を感じることや他者を気にすることでストレスを感じると考えられる。

被受容感被拒絶感と中核信念とストレス反応

男性においては，被受容感はPSおよびPOを高めるものの，ストレス反応には影響を与えなかった。しかし，被拒絶感はNOおよびNSを高め，NSを感じたときにストレス反応を生じていた。よって，男性は被拒絶感を感じてNSが強められた時にのみ，ストレス反応を生じると考えられる。

女性においては，被受容感はPSおよびPOを高めるものの，PSおよびPOはストレス反応に影響を与えなかった。しかし，被受容感は直接的にストレス反応と負の関連があり，直接的にストレス反応を低めていた。しかし，$\beta=-.236$と値が小さいため，ストレス反応を低減させる働きとしては弱いことが考えられる。また，被受容感は被拒絶感とともにNOに対しても正の関連があることが示されており，他者に対して疑いのような感覚を感じた時にはストレス反応を示すと考えられる。被拒絶感は，NOおよびNSを高め，NOおよびNSを感じたときにストレス反応を生じていた。よって，女性は警戒心や疑いのような感覚や被拒絶感を感じた時にNOおよびNSを感じ，ストレス反応を生じることが考えられる。

総合考察

被受容感は男女ともに，PSおよびPOを高めることが見いだされた。これは，被受容感という「他者に大切とされている認識と情緒」が他者は良い人であるという認識や，自分は価値があるという認識をもたらしていると考えられる。しかし，PSおよびPOが高まることのみではストレス反応とは関連がなく，ストレス反応が生じても低減させる作用はないことも見いだされた。女性においては，被受容感には直接的にストレス反応を低減させる働きがあることが示されており，女性は受容されている認識を感じることでストレス反応が弱まると考えられる。また，女性においては，被受容感を感じたことにより，他者への疑いや警戒心のような感覚を感じたときにストレスを感じることも見いだされた。

また，被拒絶感は男女ともに，NOおよびNSを高めることが見いだされた。しかし，男性はNSを感じたときのみストレス反応を生じ，女性はNOまたはNSを感じたときにストレス反応を生じていることから，男性は他者からはあまり影響を受けず，自身の評価が悪い時のみストレス反応を感じると考えられ，反対に女性は他者を気にすることでストレス反応を生じると考えられる。和田（1993）は，一般的に男性は達成，競争，独立を強調して育てられ，女性は暖かさや親密感を強調して育てられると述べている。そのことから，女性は他者の行動を気にする傾向があり，被受容感を感じたと

きにストレスを感じるが，男性は他者の行動については，あまり気にしていないのではないかと考えられる。

よって，被拒絶感被受容感が中核信念に及ぼす影響には有意な性差は出ていないものの，性別による特徴があり，中核信念がストレスに及ぼす影響にも違いがあることが示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究では，被受容感・被拒絶感が中核信念に影響を及ぼすという過程を想定し，被受容感および被拒絶感を感じることで他者および自己へのスキーマにどのような影響を及ぼすのか，また，他者および自己へのスキーマがどのようなストレス反応を及ぼすかについて検討を行った。被受容感・被拒絶感が中核信念に影響を及ぼすという過程は明らかになったが，被受容感・被拒絶感が中核信念を強化していく過程については明らかになっていないため，今後，他者および自己へのスキーマが被受容感および被拒絶感を強化していく過程についても，検討する必要があるだろう。

また，被受容感が被拒絶感とともにNOに正の影響を及ぼしていることについて，他者への疑いや警戒心のような感覚を感じたと推測したが，今後，なぜそう思うのかについてインタビューを行うなど，被受容感と他者へのネガティブスキーマの関連について検討していくことも必要であると考えられる。

また，被受容感・被拒絶感が中核信念およびストレス反応に及ぼす影響には有意な性差は見られなかったが，性別による結果の差があった。先行研究と比べ，対象者人数が少なかったことや対象の偏りがあったため，統計上の性差は見られなかったかもしれない。今後，対象人数を多くすることや，対象の属性を均等にすることで性差が見られる可能性があるため，対象についても工夫にして検討する必要がある。

また，今回は，性差と被受容感・被拒絶感の交互作用については今回検討していないため，今後検討していく必要がある。

引用文献

相田 直樹・磯部 智加衣（2015）．拒絶感受性が他者からの曖昧な拒絶後の選択的注意に及ぼす影響 対人社会心理学研究，*15*，39-44

Arther Freeman（1989）.The Prctice of Cognitive Therapy *Dorecter of Professional Education Center of Cognitive Therapy of University of Pensylvania*（アーサー，F. 遊佐安一郎（監訳）（1989）.認知療法入門 星和書店）

Baumeister, R. F. & Leary, M. R.（1995）. The need for belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, *117*, 497-529.

Beck, J. S.（1995）. *Cognitive therapy: basic and beyond*. Guilford Press.（ベック，J. S. 伊藤 絵美・神村 栄一・藤澤 大介（訳）（2004）.認知療法実践ガイド基礎から応用まで―ジュディス・ベックの認知療法テキスト― 星和書店）

Bowlby, J.（1973）. *Attachment and Loss. Vol.2 Separation: Anxiety and Anger*, New York: Basic Books.（ボウルビィ，J. 黒田実郎・岡 田洋子・吉田恒子（訳）（1991）. 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版）

Downey, G., & Feldman, S.（1996）. Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 1327-1343.

榎本淳子（2000）. 青年期の友人関係における欲求と感 情・活動との関連 教育心理学研究，*48*，444-453.

Fowler, D., Freeman, D., Smith, B., Kuipers, E. K., Bashforth, H., Coker, S., Hodgekins, J., Gracie, A., Dunn, G., & Garety, P.A.（2006）. The Brief Core Schema Scales（BCSS）: Psychometric properties and associations with paranoia and grandiosity in non-clinical and Psychosis samples. *Psychological Medicine*, *36*, 749-759.

穂坂 智俊・矢冨 直美・新名 理恵・本間 昭・坂田 成輝（1989）. ストレス研究における心理学的アプローチ(Ⅲ). ―一次的反応(情動的反応)と身体的反応の関係― ストレスと人間科学，*4*，114-115.

本多 潤子・桜井 茂男（2000）.日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成 筑波大学心理学研究，*22*，175-182.

Katja Staebler, Esther Helbing, Charlotte Rosenbach, Babette Renneberg（2011）. Rejection sensitivity and borderline personality disorder *Clinical Psychology & Psychotherapy*, *18*（4）, 275-283.

Levy , S.R. , Ayduk, Ozlem, Doeney, G(2001). The role of rejection sensitivity in people´relationships with significant others and valued social groups. *Oxford Press*, 251-289.

新名 理恵・坂田 成輝・矢冨 直美・本間 昭（1990）. 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学，*30*，29-38.

宮崎 弦太（2011）. 社会的拒絶への対処行動を規定する関係要因－関係相手からの受容予期と関係へのコミットメント― 実験社会心理学研究，*50*（2），194-204.

奥野 誠一・小林 正幸（2005）. 小中学生版 / 相互独立 性・相互協調性尺度の作成―信頼性および妥当性 の検討― 東京学芸大学教育実践研究支援セン ター紀要，*1*，3-12.

岡田 涼・中山 留美子（2008）. 対人的拒絶研究の外観―実験社会心理学領域を中心に― 名古屋大学教育発達科学部紀要心理発達科学，*55*，7-45.

尾関 友佳子（1990）. 大学生のストレス自己評価尺度：質問紙構成と質問紙短縮について 久留米大学大学院紀要：比較文化研究，*1*，9-32.

尾関 友佳子（1993）. 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂―トランスアクショナルな分析に向けて― 久留米大学大学院比較文化研究科年報，*1*，95-114.

近江 則子・田名場 忍（2004）. 大学生の被受容感と被拒絶感に影響を与える他者要因の検討 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要，*1*，9-14.

杉山 崇（2004）. 被受容感・被拒絶感は抑うつに関与するのか，随伴するのか?:3時点の縦断的調査からの検討 山梨英和大学紀要，*3*，9-16.

杉山 崇・坂本 真士（2006）．抑うつと対人関係要因の研究：被受容感と被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討　健康心理学研究，*19*，1-10.

Stuart W. Quirk, David Wier, Shannon M. Martin & Allison Christian（2015）. The Influence of Parental Rejection on the Development of Maladaptive Schemas, Rumination, and Motivations for Self-Injury. Jounal of Psychopathology and Behavioral Assessment, *37*（2）, 283-295.

高木　邦子（2004）．否定的対人感情研究の諸相　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　心理発達科学，*51*，63-76.

Williams, K, D. & Zadro, L.（2005）. Ostracism: The indiscriminate early detection system. In K. D. Williams, J. P. Forgas & W. von Hippel（Eds）, *The social outcast: Ostracism, social exclusion*, *rejection*, *and bullying*. New York: Psychology Press. Pp.19-34.

山内 貴史・須藤 杏寿・丹野 義彦（2009）．日本語版Brief Core Schema Scalesの信頼性・妥当性　心理学研究，*79*，498-505.

和田　実（1993）．同性友人関係ーその性および性役割タイプによる差異ー　社会心理学研究，*8*，67-75.

The influence of the sence of rejection on core belief and mental health in university students

Mitsue KOBAYASHI and Junichiro OOKUBO

Abstract

The purpose of this study was to examine 1) the between between the sense of rejection and the core belief, and 2) what kind of mental health problems occur because of the sense of rejection from viewpoint of stress reaction. Two hundred and fifty university students had completed the questionnaires which was consisted of Sence of Acceptance and Rejection Measurement Scales and, Brief Core Schema Scales, Stress Self-Rating Scales. Multiple regression analysis revealed a significant sexual differences. The results for males showed that the sense of acceptance did not influence stress reaction although influenced both positive others-schema and positive self-schema. The sense of rejection had influence on both negative others-schema and negative self-schema, and it was shown that negative self-schema caused stress reaction. Results for females. Revealed that the sense of acceptance did not influence stress reaction although influenced both positive others-schema and positive self-schema. And that it not only influenced direct stress reaction, but also had influence on negative others schema, and it was shown to produce a stress reaction. The sense of rejection had influence on both negative others and self-schema, and was shown to produce stress reaction.

Key words: sence of rejection, sence of acceptance, brief core schema, stress reaction